あっけない絵画、明快な彫刻

近藤恵介・冨井大裕

2010年12月4日（土）-12月25日（土）

Gallery Countach

撮影：中岡恵美

あっけない絵画、明快な彫刻
近藤恵介・冨井大裕　展

2010 年 12 月 4 日（土）-12 月 25 日（土）
13:00-19:00　日月祝休　入場無料

オープニング・レセプション：2010 年 12 月 4 日（土）　18-20 時

[関連イベント] 彫刻と絵画をめぐるワークショップ
冨井大裕の指導による彫刻を制作し（前半）、近藤恵介の指導により制作した彫刻へ彩色（後半）をします。
制作された作品は、展覧会場での展示を予定しています。
2010 年 12 月 4 日（土）　14-16 時
参加費：500 円（材料費）　定員：15 名（要予約）
※道具等、別途持参するものはありません。
※電話又はメールにて、gallery countach までお問い合わせ下さい。

会場：gallery countach 清澄
〒135-0023 東京都江東区平野 2-16-8 イトウビル 4F
tel：050-5532-5081
web：http://gallery-countach.com

企画：近藤恵介
協力：レントゲンヴェルケ

展覧会概要

この度、ギャラリーカウンタック清澄では、画家・近藤恵介（1981-）と、彫刻家・冨井大裕（1973-）による 2 人展を開催いたします。
近藤恵介は、2007 年東京芸術大学美術学部絵画科日本画専攻卒業。日本画材を用い身の周りにある様々なものを描きながら、精緻で緊迫感のある画面をつくり出します。空白の多い一見してシンプルな画面ではありますが、時間をかけ絵の具を支持体に定着させる「身振り」を繰り返した画面には、独特な広がりが生まれます。
冨井大裕は、1999 年武蔵野美術大学大学院造形研究科彫刻コース修了。日用品から通常とは異なる新たな使用法を見いだし、その使用法を用いて、シンプルで美しい彫刻を制作します。その作品は、彫刻の原理的な魅力を示すと同時に、素材となっている日用品がいつでも日用品に還元可能であるという、作品存在の危うさを見るものに突きつけます。

本展は、冨井の作品を偶然にみた近藤が、展覧会へと冨井を誘うことから始まりました。作品を「みる」ことが作品を「つくる」ことへと直接的に繋がり、作品に触れた際に生まれた感情の動きの質そのものが作品となります。
主な出品作品は、冨井の過去作を近藤が画面内に描いた新作絵画、近藤の過去の絵画作品を使った冨井の新作彫刻となります。また、近藤が描いた冨井の過去作のうちのいくつかも実際に展示されます。
作品をつくることや作品をみることが、いくらかの経緯を持って、作品そのものであったり、それ以外のことに更新されていく様子を、2 人の作品を通して実感いただけることでしょう。
絵画や彫刻を考えることを起点にした、可能性の現在形を探る展覧会となります。

また、会期初日には参加者を募ってのワークショップを開催いたします。展覧会に来て作品を鑑賞するだけではなく、アーティストと共に身体を動かしながら作品制作をおこないます。展覧会という「場」を機会に、「みる」と「つくる」を繋ぎ、その後の生活に作品が溶け込んでいく契機になれば幸いです。

テキスト１：
経緯のこと　　近藤恵介

冨井さんの作品を初めて観たのは、都内書店で開催された選書フェアの棚でのことだった。作品を観るつもりではなくて、選書棚を見るつもりで足を運んだそこには、小さくて綺麗で「あっけない」作品があった。並んだ本に寄生するように、カラフルな付箋が形を成していくつもくっついていた。付箋を貼り合わせて成形された彫刻は、付箋から付箋へと繋がりながら本棚を自由に横断し、ひとつひとつが自立した作品でありつつも、本棚という空間をひっそりと支配していた。
作品に何処でどのタイミングで触れるのかはとても重要で、その後の作品との関係を大きく規定する。不意打ち的に観た冨井さんの付箋の作品には、それを受け止める為の場所は用意していなくて、身体のあちこちあらゆる場所にペタペタ貼り付いた。
書棚の下のチラシコーナーに、馬喰町のギャラリーでの冨井さんの展覧会のチラシが置いてあり、一部持って帰って、後日観に行った。

展覧会の感想は「あっけなさ」とそれに起因した「持続」だった。ホワイトキューブの空間に少しずつ作品が置いてあり、それが日用品を元につくられている、というのが「あっけなさ」を感じた理由なんだと思う。日用品を組み替えることによって形成されている作品はとても丁寧に展示されていて、佇まいは清潔で美しく感じた。作品としてしっかり自立した強さを持ちつつ、それが日用品を元に（しかもかなりそのまま）つくられていることに静かに感動した。
作品のことがしばらく頭から離れずにいて（頭のなかの隙間をカラフルな付箋が這うように）、作品のことをたまに考える（というか思い出す）日々が続いた。思い出すことが「持続」していることに気が付いた時に作品の別の魅力が染み出してきた。一見「あっけない」のだけれど、日常の思考の中に浸食してくるじわじわした効き目をもった作品であることを実感したのだ。僕のなかでの意識の「持続」を誘発したのは、日用品という生活に密着したものとしての類型的な残像を残しつつ、みたことの無いものへと軽々と変身を遂げた作品が、頭の中で日用品と作品とを行き来する「持続」的な思考に転化した結果なのだと思う。

僕の作品は日本画材という描くのに非常に時間のかかる素材で描かれている。絵の具を練っては描くという作業の「持続」によって出来上がった作品は、非常に空白部分が多く「あっけない」と言える。
僕は、普段制作において、描く為の経緯を非常に意識している。経緯といってもそれは実際に手を動かす作業周辺のことを指していて、一枚の絵を完成させるのには、制作の準備（材料の調達、紙の貼り込みなど）、実際の制作（線を引く、絵の具を塗るなど）、と様々な手順を踏む。そのためには多くの時間が必要で、時間を確保してそれを延長させていく、ということに繋がっていく。文脈や論理から作品を構築するのではなくて、実際に手と身体を動かして、よく分からないけれど「作品＝絵画」と呼ばれるガッチリしたようで曖昧なものを、いったん引き受けて作品化していく。それは、日用品やその状況を受け入れて制作をしている冨井さんの作品にも強く感じた。

そして、一緒の空間に作品を置くとおもしろいのではないかとある日突然思った。というより、置いてみたい、と思った。それからもう少しして、冨井さんの彫刻作品を描いてみたいと思った。

このような経緯があり、知り合いを介して展覧会のオファーをした。全くの他人からの急な誘いにも関わらず、意図を理解した上で快諾いただいた。
その際、以上のような感想を冨井さんにメールで伝えたところ、補足の返信をいただいた。以下、メールより抜粋。

近藤さんが感じたあっけなさと持続は、僕の言葉にすると「明快な構造／組成」を「更新／持続」することによって、作品の「自立」を追求するということになるでしょうか。僕は、そのためにとるべき有効な手段として、彫刻という方法（＝制限）を採用しています。以上のことをステイトメントでは大雑把に「つくることでつくることを更新する」などと言ってもいます。(2010.2.10 のメールより)

作者本人の言葉は非常に「明快」でこれまで僕の頭のなかをぐるぐる回っていた思索は急に整理された。雑多で多様な日用品を受け入れる強い意志と、彫刻という方法を自由な器へと変化させていく鮮やかな手つきは、メールの文章にもはっきりと表れていて、作品に感じた強度と似た質のものだった。

今回の２人展での作品については、冨井さんにいくつかのお願いをした。
僕の絵画のなかに冨井さんの過去の彫刻作品を描かせて欲しい、ということと、僕の過去の絵画作品を使用して新作を制作して欲しい、ということ。これらの作品が本展の中心となる。
自分の作品のなかに他人の作品を描くことはこれまでなかったことだし、冨井さんは他人の作品を自分の作品として再構成することになる。「絵画に対しては少なからずリスペクトがある」と仰っていたので、やりづらいかなぁ、と思いながらもお願いした。
冨井さんの言う「つくることでつくることを更新する」というのを、僕は絵画のなかで、冨井さんは彫刻のなかで試してみる。手を動かすことの「持続」によって、いったん完成をみた作品のその先へ進んでみようと思う。

日用品が冨井さんの手を介すると作品になるように、絵の具が僕の手を介することで何か具体的なモノにみえるように（もしくはみえないように）、絵画と彫刻の間、モノと作品の間、を「明快」に様々な層 / 相を通してアプローチできれば、と思っている。

2010.9.10　早朝

テキスト２：

丁寧であること　　冨井大裕

はじまりは、知人から聞いた話であった。「近藤さんという人が冨井さんと展示をしたいそうです」正直、驚いた。そもそも、「近藤さん」という人を僕は知らない。知人の話だと「近藤さん」は絵描きだそうで、僕と二人で展覧会をやりたいと言っているらしい。「近藤さんってどういう人？」と知人に尋ねても、「僕も言付かっただけなので…」と頼りない返事。簡単に返事をするわけにもいかず、そのまま、しばらく放っておくことにした。すると、しばらくして近藤さんからメールが届いた。

文面はかなり丁寧なもので、その上、驚いたのは、彼がやりたい展覧会の内容とそこに至った経緯を、落ち着いた、そしてかなりの長文で僕に説明していることだった。興味のあることに向かってシンプル且つストレートに、情熱はあるが、情熱に流されずに相手の立場やその時の状況を考慮にいれて現実的な行動をとる人。そんな人物像が文面からは察する事ができた。知らない人間に頼み事をしているのだから、丁寧で落ち着いた文面は当然のことかもしれない。しかし、この当然のことをきちんとできる人間がいまの世の中あまりにも少ない。近藤さんに興味をもったので、会うことにした。実際、会ってみて驚いた。長髪を上にねじるようにまとめた髪型（その髪型を一般的にはどのように呼ぶのか僕は知らない）、レゲエの人か修行中の坊さんのような髭…要するにうさんくさいのである。僕は、良くないことだが、人を外見から判断する傾向が少なからずある。一瞬、身構えたが、近藤さんが声を発した瞬間からその判断は間違いだったことがわかった。近藤さんは、突然のお願いですいませんという一言のあと、改めてメールで送ってくれた内容を、やはりメールで僕が感じた印象と同じく、落ち着いた口調で丁寧に説明してくれた。近藤さんにとても良い印象を持ったので展覧会を引き受けることにした。

改めて、近藤さんの作品を見直してみた。作品は、大部分が余白である画面の下部に、我々が日常、目にすることのできる品々が小さく描かれ、同一水辺線上に配置されるタイプのものがほとんどである。一見すると、最近（少し前？）の絵画にありがちである、日常の何事かを抽象的な絵画構造の中に当てはめることで作品を成立させるタイプの絵に見えるかもしれない。しかし、実際はそうではない。近藤さんは、絵画に対してとても丁寧な姿勢で接している。良い絵描きが絵画に対して丁寧に接しているのは当然のように思うが、近藤さんの丁寧さは、いわゆるペインターのそれとも少し違うように思う。あらゆるもの対して丁寧に接している。丁寧が徹底されている。モチーフとなる対象に、筆の運び方に、紙の貼り方に、パネルの作り方に、作品について話すときの語り口に…全てに渡って徹底されている。そんな、丁寧が徹底された末にできた絵は、やはりとても丁寧で、そして端正な印象を強く感じさせるものだった。

そんな近藤さんとの展覧会。近藤さんから提示してきた僕への提案は、丁寧さとはかけ離れた過激なものだった。「僕は冨井さんの作品を絵に描きますから、冨井さんは僕の絵を使って作品を作ってください」これは対等の条件に聞こえるかもしれないが、実際のところ、かなり不公平な話である。どう不公平かというと、自分の絵を素材に差し出す近藤さん（作品を失う）＜素材が手に入る冨井（作品を作れる）ともとれるし、冨井の作品を絵に描く近藤さん（新しいモチーフを得る）＞近藤さんの絵を制作の為に使う冨井（失敗できない）ともとれる。どちらにしても、とてもリスキーな試みなのだ。この試みを近藤さんは、いつものように徹底された丁寧な口調で、楽しげに、僕の前で語っていく。時間と手間と思いをかけた自分の絵が絵でなくなるかもしれないというのに、この人は何故、こんなに楽しそうに話しているのだろう。僕は、絵画（画家）に対して、少なからず尊敬の念を持っている。絵は誰にでも描けるからこそ、絵描きが絵を描いていることを宣言するには、大変な決意と時間を要するものだと僕は思っている。いい絵描きには、佇まいが穏やかだったり、軽やかだったり、気ままな感じだったりして、制作の苦しさなんて全然感じさせない人が多いように思うのだが、実際は生活に追われる毎日の中で、絵を描くことだけは手放すまいと砂を噛むような思いで日々画面に向かっているのではないかと思う。そんな画家の姿を思うと、そしてそんな思いを微塵も感じさせない軽やかでしっかりとした絵を見ると、自分の姿勢を正される思いがして、妙に気持ちが良いのである。近藤さんの作品もそんな僕が尊敬する絵画のひとつである。そんな絵を切り刻んでもくしゃくしゃにしてもよいと、近藤さんは、あの丁寧な口調で、笑みまで浮かべて僕に言うのだ。

僕の作品は、美術もなにも知らない人に「ゴミと間違えられませんか？」とたまに質問されることがあるような作品だ。確かに、日常使われるべき用途のあるものが、全く本来の使い方とは異なる佇まいで置かれているだけなのだから、ゴミと間違えられても仕方がない。ただ、僕はそんなゴミを、あるべきところにあるべきかたちで存在させたいと思っている。そうすれば、ゴミはゴミでありながら、捨てられない、動かせないゴミとなる。捨てられない具体的な理由などないが（「あるべきところ、あるべきかたち」というのは十分な理由かもしれないのだが）、とにかくぱっと見て、これは捨ててはいけない、動かしてはいけないものだと誰がみても思えるもの。僕はそういうものを作りたいと願っている。

僕は絵画にも、いや絵画だからこそ、日常のゴミをかけがえのないものに変える力があると思っている。なんでもない一片の紙切れが、画家の走らせた一本の線によってかけがえのない紙に変貌する。芸術の力をこれほど明快でストレートに示す手段が他にあるだろうか。これは画家にとっては当然のことかもしれない。いや、当然であるべきだろう。だからこそ、僕はこのことを大切に考えることが必要だと思っている。

近藤さんは、そんな絵がゴミとなるかもしれない作業の為に、自分の絵を差し出すと言っている。差し出される僕にとっては恐ろしい申し出だ。とても信じられない。しかし、彼の丁寧な口調を聞いていると、不思議と断れないのである。結局、「絵が駄目になってもいいですから」という近藤さんに対して、本当は「わかりました。一枚くらい駄目にしてしまうかも」と答えたいのに「大丈夫です。駄目になんかしません」と答えて、引き受けることにした。展覧会は12月で、最近、近藤さんの絵が僕のアトリエに届いた。どうしようかと思案中だが、ひとつだけはっきりしていることがある。近藤さんの絵を絵としてみないこと。「かけがえのない紙」として敬意をもって引き裂き、破ることで、そこにあるべきものを作ること。成功すれば、過去に絵であった紙は、違う姿で再び絵としての魅力を発揮するのではないかと思う。

近藤恵介（こんどう・けいすけ）...

1981年福岡県生まれ。東京芸術大学美術学部絵画科日本画専攻卒業。以降、展覧会を中心に国内外で活動。現在、東京在住。また、アートワーク担当として参加しているthe coffee group（小島ケイタニーラブ、近藤恵介、鈴木雄介、蓮沼執太、古川日出男）のCD『ワンコインからワンドリップ』がheadzより発売中。詳細はHP（http://coffeehlt.blogspot.com/）にて。

作家webサイト：http://www.kondokeisuke.com

展覧会

主な個展
2010 「 絵画の身振り」Satellite、岡山
2009 「 このへんからそのへん、そしてあそこらへん」Gallery Countach、東京
2008 「 いい地図」Gallery Countach、東京
「 project N 34 近藤恵介」東京オペラシティ アートギャラリー コリドール、東京
2006 「 毎朝歩く道について寝る前に考える」トーキョーワンダーサイト本郷、東京
2005 「 近藤恵介展」RICE+, 東京

主なグループ展
2010 「 Countach Caravan」ギャラリー点、金沢
2009 「 ビューイングルーム」Gallery Countach、東京
「 Re:Membering -Next of Japan-」Gallery LOOP、ソウル、韓国
「 My story - ひとりあそび」MA2 Gallery、東京
2008 「 モンブラン ヤング アーティスト パトロネージ イン ジャパン」モンブラン銀座本店、東京
2007 「 東京画 - ささやかなワタシのニチジョウのフーケイ」トーキョーワンダーサイト渋谷、東京
2006 「 東京 - サンフランシスコアートフェスティバル'06」国営昭和記念公園みどりの文化ゾーン、東京 / the LAB、サンフランシスコ
2005 「 トーキョーワンダーウォール公募2005」東京都現代美術館

受賞
2005 「the Ambassadors'Art Prize 2005」,Decourtenayギャラリー（ベルギー）／Decourtenay Prize受賞
「トーキョーワンダーウォール賞」トーキョーワンダーウォール公募2005

アートワーク
蓮沼執太｜Shuta Hasunuma /『 POP OOGA』, HEADZ, 2008年（CDアートワーク）
anonymass /『 anonymoss』, ミディ, 2008年（CDアートワーク）
蓮沼執太｜Shuta Hasunuma /『 OK Bamboo』, Western Vinyl, 2007年（CDアートワーク）

私とその状況　2009
岩絵の具、水干、膠、墨、鳥の子紙
53×53cm
(c)KONDO Keisuke

本に絵　2009
岩絵の具、水干、膠、墨、本
25.8×41.2cm
(c)KONDO Keisuke

冨井大裕(とみい・もとひろ)

1973年新潟県生まれ。武蔵野美術大学大学院造形研究科彫刻コース修了。
日用品の使用と原理的な彫刻の両立を試みる作家として知られる。これまでに個展・グループ展多数。
2008年3月より、茨城県のアーカス・スタジオにて、個展「企画展＝収蔵展」を作品が朽ちるその日まで開催中。
2004年より、東京都 国分寺のswitch pointにて、10年連続個展を継続中（今年11月で7回目）。
2011年「MOTアニュアル」東京都現代美術館/東京、個展をレントゲンヴェルケ／東京で開催予定。
東京在住。

作家webサイト：http://tomiimotohiro.com/index.html

展覧会

主な個展
2010　「つくるために必要なこと」金沢美術工芸大学アートギャラリー／石川
　　「ball pipe ball」玉川大学　Tamagawa Art Gallery Projects／東京
　　「STACK」NADiff Gallery／東京
　　「作品展」NADiff a/p/a/r/t 店内／東京
　　「catch as catch can」現代HEIGHTS Gallery DEN／東京
2009　「かみの仕事」Art Center Ongoing／東京
2008　「身の回りのものによる色とかたち」遊戯室（中崎透＋遠藤水城)／茨城
　　「企画展＝収蔵展」アーカス・スタジオ／茨城
2007　「みるための時間」武蔵野美術大学美術資料図書館・民俗資料室ギャラリー／東京
　　「αmプロジェクト ON THE TRAIL vol.2」art space kimura ASK?／東京
2005　「空白の作り方」U8 Projects／愛知
　　CAS／大阪
2004　switch point／東京(以後、`05`06`07`08`09)
2003　art & river bank／東京(以後、`07)
2001　「ある」藍画廊／東京
2000　モリスギャラリー／東京(以後、`02)
1999　なるせ美術座／東京(以後、`02)
1998　ギャラリー現／東京(以後、`99`06`09)

主なグループ展
2010　「間戸/WIND-OW」MA2 Gallery／東京
　　秋田県大館市アートプロジェクト「ゼロダテ／大館展 2010」大館市 大町商店街／秋田
　　「気象と終身ー寝違えの設置、麻痺による交通」アサヒ・アートスクエア／東京
2009　「第1回所沢ビエンナーレ美術展 ー引込線ー 」西武鉄道旧所沢車両工場／埼玉
　　「アテンプト2　矢櫃徳三・久家靖秀・冨井大裕・ジャンボスズキ」
　　カスヤの森現代美術館／神奈川
　　「Inside Outline 冨井大裕＋奥村雄樹」KABEGIWA／東京
　　「変成態―リアルな現代の物質性」Vol.2 冨井大裕×中西信洋「揺れ動く物性」
　　ギャラリーαM/東京
2008　「BROKEN」TIME & STYLE MIDTOWN／東京
　　アートプログラム青梅「空気遠近法・青梅-U39」青梅織物工業協同組合施設／東京
　　「ニューバランス」gallery Archipelago／東京
2007　「ニュー・ヴィジョン・サイタマ Ⅲ 7つの眼×7つの作法」埼玉県立近代美術館／埼玉
　　「壁ぎわ」KABEGIWA／東京
2006　「基準の技術」KABEGIWA／東京
　　「色と形」KABEGIWA／東京
2005　「12 DIVERS AT THE MOUNTAIN GATE」旧山口履物店／東京
　　「MATERIAL MIXTURE」node cube／東京
　　「芸術の山/第0合/発刊準備公開キャンプ/立体編その1」NADiff／東京
　　「字界へー隘路のかたちー」長久手町文化の家／愛知
2004　「floating scale ー「スケール」を巡る旅ー」学食2F／愛知
　　「space」U8 Projects／愛知

コミッションワーク
2008　日吉の家（設計 田中裕之建築設計事務所）／神奈川

その他
2009　作品展示「福永信フェア」ジュンク堂書店（新宿）／東京
　　作品展示「福永信フェア」ジュンク堂書店（池袋）／東京
2008　版画集「壁ぎわ」（制作　Itazu Litho-Grafik)

受賞
1999　第4回アート公募2000審査員大賞受賞

paper work(Post-it)-book piece- #3
2009
付箋、糊
撮影：柳場大
(c)Motohiro Tomii
Courtesy ： Roentgenwerke AG

roll (27 paper foldings)#3
2009
折り紙、ホッチキス
21×43×27.5cm
撮影：柳場大
(c)Motohiro Tomii
Courtesy ： Roentgenwerke AG

■掲載用写真の貸出など、本展に関するお問い合わせは下記までお願いいたします。

gallery countach（ギャラリーカウンタック） 担当：八木沢俊樹（やぎさわ・としき）
〒161-0031 東京都新宿区西落合 4-3-1 フジビル 3F
tel:03-6915-3888 fax:03-6915-3883
e-mail:ty@gallery-countach.com website:http://gallery-countach.com